

巻 頭 言

部長教授 杉原弘人

昭和36年に踏査第1号が創刊されてから、号を重ねて、ここに踏査は第10号を発刊することとなった。昨年12月、創設25周年を盛大に祝賀した探検部は、名実共に日本一の大学探検部になったと私は信じている。

先日、私は、「自然との対話」(山と溪谷社)という250ページほどの書物を拾い読みしていたら、森林生態学者で、京都大学探検部の部長を長く務めておられた、四手井綱英(しでいつなひで)先生の探検についてのエッセイを見つけた。その文章は次のようである。「探検は、単に未知の世界で冒険することではない。必ず科学調査が伴わなければならない。勿論、未知の世界では、いろいろな困難に直面することになる。その困難は、対人関係のこともあろうし、対自然のこともあろう。隊員は、そのすべてを克服する能力を持たなければならない。しかし、そうして旅を続けるだけでは探検にならない。人文、自然のいずれでも良いし、その両方に渡るテーマでも良いが、科学的調査、観察が正しく進められて、初めて探検が成り立つ。」

京都大学探検部では、科学調査を自分で独立してやる経験が学生に不足しているので、隊長、副隊長には、その道の専門家を求め、学生はその助手として参加している。私達も海外遠征の時には、先生方をお願いして参加してもらっているが、何分にも文科系、理科系の学部、学科の充実している京都大学のようにいかない。今後、この点は、私達が大いに反省すべきところであると考えている。

専門家が、学生のパーティに入り、探検するこ

とは、いろいろの世論、学説、思想に毒されない新鮮な目を持ち、未知の世界にふみ込む学生の体験、成果の邪魔になるという考えもあるが、四手井先生はこの考え方に強く反対し、次のように述べておられる。「イギリスの子供は、よく時間を守る。公園を散歩していると、遊んでいる子供が、「今、何時？」と聞きに来る、と感心している人があったが、本当は、子供が時間を守るために聞きに来たのではなく、あの人の持っている時計は金時計か、銀時計か、と賭をしているのであるという。こんなことでも、誤った観察や判断を生ずるのだから、例えば植物採取一つでも、素人と専門家では同じように出来ない。やはり、植物分類学者は専門家で、植物の集め方が違う。」

私は、動物分類学を専門にしているので、私の経験から、四手井先生に賛同する。今後、海外への学術調査には、できる限り専門家の参加が実現するように努力したいと考えている。

昭和61年には、関西大学創立100周年がやってくる。関西大学創立80周年には、ペルー・アンデス学術調査隊を南米に派遣している。この春より現役、OB、私達は、関西大学創立100周年記念事業企画を立案し、海外へ隊員20名の編成による学術調査隊の派遣を準備している。創設25年の伝統を持つ探検部にとっては、今回の計画の実現は容易ではあるが、念には念を入れて完全で詳細な計画のもと、学内の声を聞きつつ、企画を進めていく考えである。

無事故！この関西大学探検部の名誉を維持するためにも、現役、OB、顧問が一体となって頑張ろう。